

どこまでもだらだらといい加減な傾斜で続いている坂道を登り詰めたところが、目指す京極堂である。

梅雨も明けようかという夏の陽射しは、あまり清涼しいとはいえない。坂の途中に樹木など日除けになる類のものは何ひとつとしてない。ただただ白茶けた油土塀らしきものが延々と続いている。この塀の中にあるのが民家なのか、寺院や療養所のようなものなのか、私は知らない。あるいは公園か庭園のようなものかもしれない。冷静に考えれば、建物を囲うにしては面積が広すぎるから、やはり庭園か何かなのだとも思う。

坂道に名前がなかった。

いや、あるのだろうが知らない、というのが正確なところである。月に一度、いや、ときには二度、三度とこの坂道を登り、京極堂に通うようになって、もう二年が過ぎようとしている。幾度この道を通ったか知れない。

しかしおかしなことに、私の家からその坂道に至るまでの町並みも、途中にあるあらゆるものの様相の記憶も私には曖昧である。坂道の名前はおろか、このあたりの地名住所の類までも私ははつきりとは知らない。いわんや塀の中に何があるかと私には興味がなかった。

急に陽が陰った。気温は変わらない。
坂の七分目あたりで私は息を吐いた。

坂をおおかた登り詰めると、左右に脇道が現れる。油土塀はそこで左右に折れ、脇道を挟んで竹藪と古い民家が数件続く。更に進むと、雑貨屋だの金物屋だのがちらほら目につき始める。そしてそのまま暫く直進すると、隣町の繁華街へと出る。

そうすると京極堂は町と町の境界辺りに位置していることになるのだろうか。住所の上では隣町になるのかもしれない。随分と町外れにあるので客は来るのかと心配したこともあったが、こうしてみると案外隣町の人間は来易いのかもしれぬ。

京極堂は古本屋だ。

京極堂の主人は古い友人である。商売する気があるのかないか、およそ売れそうもない本ばかり置いてある。前述の通り立地条件としてお世辞にも良いとはいえない。常連客が多いから全然経営に心配はないと主人はいうが、怪しいものだと思はう。

何でも、京極堂では専門書だの漢籍だの、他の古書店では敬遠されるようなものが能く捌けるらしい。そこでその手の本を掴まされた同業者が皆それを廻して来る。すると余計そういった本はここでしか手に入らないということになり、学者や研究者などの固定客がつく。遙遠方から訪れる好事家などもいるという。しかしそれも当の主人の談であるから本当かどうかは藪の中である。

私は寧ろ副業の収入の方が安定しているのではないかと踏んでいるのだが、それについて彼が語ることはない。

貧弱な竹藪に挟まれた蕎麦屋の隣が京極堂である。その先には小さな森があり、森には小さな社がある。京極堂の主人は元元この神社の神主である。というより今も神主はやっていて、祭りのときなどは祝詞のひとつもあげるらしいが、私はまだその姿を見たことがない。

主人自らが書いた、達筆なのか下手なのか能く判らない『京極堂』という額をちよいと見上げ、開け放つてある戸を潜る。主人は毎度のことながらまるで親でも死んだような仏頂面で和綴の本を読んでいた。

「よう」

私はおよそ挨拶とは思えない珍妙な声をあげてから、帳場の脇の椅子に腰を掛けた。同時に椅子の周りに積んである未整理の書籍の山を見る。

勿論新しく入荷した掘り出し物を捜しているのだ。

「君も落ち着きのない男だ。挨拶をするならする、座るなら座る、本を見るなら本を見る。気が散るじゃないか」

京極堂は読んでいる本から目を離さずにそういった。

私は彼の言葉をまるで無視して、挨拶のついた本の背表紙を目で追った。

「どうだい、何か面白そうな出ものはないかい？」

「なご」

京極堂は間髪を容れずに答えた。

「だからこんなものを読んでいる。だがね君——面白い、面白くないという君の尺度にもよるが、だいたいこの世に面白くない本などはない。どんな本でも面白いのだ。だから読んだことがない本は大抵面白いが、一度読んだ本はそれより少し面白がるのに手間がかかるという、ただそれだけのことだ。そう考えると君にとって面白い本はここに積んである未整理の本に限らず、その辺の書棚にもう何年も前から挨拶を被つてずっと並んでいる。それを捜すのは容易なことだから、さつさと選んで買いたまえ。少少なら勉強してあげても良い」

そうまくしたてるように一気になると、気難しい古本屋は顔を少し上げてにっと笑った。「僕は琴線に触れたものにしか触手が動かないんだよ。そりゃあ真剣に読めばどんなもんでも面白いのかもしれないが、僕の求める読書は君のそれとは違うのさ」

私はいつものようにのらりくらりと会話を躡す。

私の望むと望まないにと拘かからず彼の話題はこの先。パラノイヤのようにどんどん膨らみ、こんなつまらないきつかけで始まった会話でも、とどの詰まりは天下国家を論じるような大げさな話題になることが多い。私はそれを聞くのが楽しいのか、わざと話を逸そらしてとんちんかんな返事をすることがある。

主人は相変わらず人を馬鹿にしたような目つきで私を見ると、更に馬鹿にしたような口調でこういった。

「僕は君のように不熱心な読書家を知らない。そもそもうちに来る客は皆もつと本に対して執念を持っている。君は普通の何倍も読書欲があるのにも拘らず本に対して執着心がなさ過ぎるよ。だいたい君は読んだ本を次次売ってしまうのだから酷い」

確かに私は、結局買った本の八割は売ってしまう。そしてその度にこの偏屈へんくつな友人にブツブツと非難されるのである。だが、いくら文句をいったところで買い上げるのは目の前に座っているこの男自身なのである。

「僕のような人間がいるから君の商売は成り立っているのじゃないか。誰も本を売らなくなれば、古本屋は魚が獲れない漁師のようなものだ。この書棚に並んでいる君の獲物は凡すべて僕のような、本を売ってしまうような不逞やたらの輩やからから釣つったものじゃないか」

「本と魚と一緒にする奴があるか」

京極堂はそういった後、ちよつといい淀よどんだ。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。